

審査の結果の要旨

氏名 藤澤 奈都穂

中米地域では、庇陰樹のもとでコーヒーを栽培するコーヒー・アグロフォレストリーが森林保全と農村開発の両立を意図する政府により推進されてきた。一方で、自給作物を栽培する焼畑は、コーヒーの小規模生産者にとっても重要な生業である。しかし、地域住民の生活におけるコーヒー栽培と焼畑の重要性や役割は、別々に議論されてきた。本研究は、コーヒー栽培地（以下コーヒー林）と焼畑それぞれの土地利用実態を明らかにしたうえで両者を統合的に捉え、地域住民の生活における重要性を明らかにすることを目的としている。具体的な課題は、(1)各世帯の土地の配分、(2)そこで栽培・維持されている植物資源、(3)それら植物資源の利用、を明らかにしたうえで、(4)生業戦略のなかでコーヒー林・焼畑それぞれの土地利用の重要性を検討することである。なお、生業戦略に大きな影響を与える土地所有面積の違いに着目し、調査対象世帯を大・中・小規模の3グループに分けて分析を行った。

調査対象地はパナマ共和国コクレ県北部サンペドロ村（約160世帯900人）である。山間部に位置するコクレ県北部はロブスタコーヒーの主要生産地となっている。現地には2009年8月から2015年10月までの間に、合計で約19か月間滞在しフィールドワークを実施し、村の住民（計55世帯）・環境庁・農牧省の役人を対象としたスペイン語での聞き取り調査、村における参与観察、農地の実測、毎木調査をおこなった。

土地の配分については、土地不足が問題となる中で、小規模土地所有世帯の焼畑用地は少なく、コーヒー林が所有地のほとんどを占めていた。しかし、小規模土地所有世帯は大規模土地所有世帯から土地を借り、焼畑を行うことが可能であり、自身の土地にはコーヒー林を維持していた。コーヒー林は、土地所有規模に関わらず換金作物や木材資源といった資産を貯蓄する場として維持されていた。また、各世帯は土地の性質に適した作物を把握し、小規模に複数の焼畑やコーヒー林を開墾することで微少な環境の違いに応じて使い分け、土地を有効活用していた。

植物資源の栽培・維持については、焼畑における作物選択や組み合わせ、またコーヒー林における造成方法や庇陰樹選択、について村内で共有されている理想の形式は存在せず、世帯内での時々の需要を反映した畑が複数開墾され、それらが異なった特徴を持ち多様な資源が保たれていることがわかった。焼畑では、特に土地不足を実感している中規模土地所有世帯は新たな作物の栽培や農法を試み、それにより栽培種数が増加していた。焼畑はこのような「試みの場」として重要であることがわかった。一方コーヒー林では、各世帯の庇陰樹種の選好性は強くなく、そ

のため栽培地や世帯ごとに異なった庇陰樹組成となり、その結果として多様化していた。

植物資源の利用については、焼畑の重要性が世帯によって異なっていることがわかった。大規模土地所有世帯は焼畑による自給に加え、作物を村内で販売し、焼畑の重要性が増加していた。中・小規模土地所有世帯は主食作物を他の農地からも生産し、また村外収入が多い小規模土地所有世帯は焼畑作物を購入していた。一方、ロブスタコーヒーは品質が問われないため、手をかけずに現金を得る手段として多くの世帯が重視していた。また、コーヒー林や焼畑の様々な環境から入手される植物資源は、在来の物質文化において重視される一方、新たな利用方法の考案により価値が見出されていた。

以上を統合して各世帯の生業戦略と焼畑・コーヒー林の重要性を検討した結果、生業戦略に応じて異なる植物資源への需要が、世帯の所有地を超えて焼畑とコーヒー林によって社会的に満たされていることが確認できた。結論として、焼畑は各世帯が生業の変化をもたらす外部要因に積極的に対応する手段を模索し試す場となっていること、そしてコーヒー林は住民にとって長期的な視点で予測できない外部からの影響へ対応する手段の可能性を維持する場となっていることが実証された。生業が常に変化する住民の生活において、それぞれの土地利用を保つことで、短・長期的に外部影響に対応できる幅を広め、生計維持の柔軟性を保持しているといえる。

以上のように、本研究はパナマ農村における焼畑とコーヒー栽培の重要性を人々の生業戦略のなかで総合的に解明したものであり、学術上応用上の貢献を認めることができる。よって、審査委員一同は本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。